



新編  
海防  
珠集  
下

竹  
風  
尊  
雲  
鶴  
暗  
曉  
松





和漢朗詠集卷下

雜

風曉草

雲松鶴

晴竹猿

管弦

文韻

酒

夾井藏書



山付山水

水付漫

禁中

右京

右官付

仙家付

山家

田家

隣家

山寺

佛事

僧

閑居

眺望

錢別

行旅

度中

帝付

親王付

丞相付

將軍

刺史

詠史

王昭君

妓女

遊女

老人

交友

懷舊

述懷

孝子

祝

戀

無常

白















お般身あるも海初明は一光の光輝を域何  
わく川まのさくまうしはあゝ露の  
ときてしよひのまらうれとまわ

ね

但有菱松尚仰下更世一車六心平  
ま山省雪清指生は心為世も梅鶴心  
子丈凌雪夜在吟愁原くは百歩  
礼風誰有出是江由く射

九月及三伏く暑月竹合福午之風

言冬をまふ言く寒朝松葉若子之徳

十の葉霜相は露つ子年色る中源

合西原松天更霜秋林葉火の空を

とさうはかろくわみりともくわくわ  
いゆいゆかのまきありけり  
これんくむいさうしありあすみん  
わまうのいんさうしありあすみん  
れまうのいんさうしありあすみん

江相公

泉子

集



竹

煙葉家家就 侵寒色 同村 蕭蕭 云 杜 君  
既藉 素場 今宵 月 子 歎 看 雲 又 鳥 相 輝  
晉 騎 共 秦 軍 王子 歎 氣 稱 已 志 居  
在 子 之 為 多 白 樂 天 志 志 為 吾 友  
并 華 東 神 傳 鳳 皇 碧 梧 枝 從 此 結 交  
讀人不知

草

沙頭 西 深 斑 駁 草 水 面 風 絲 碧 波  
西 施 欲 乞 今 竹 七 志 恐 徒 春 園 白 草 頭  
飄 若 滿 空 之 草 子 誰 能 測 之 卷 之 暮  
蕭 條 你 襟 雨 濕 原 思 之 樞  
君子 之 言 暗 初 為 後 鳥 在 之 落 眩 動 紛 雲  
華 山 有 馬 蹄 狂 走 傳 野 之 無 人 踏 漸 涼

後江湘公集

伊胤



かのそくにもあがりるとはあつたあり  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと  
わたりつともあがりましまさんと

鶴

鳩少人の踏高位鶴有業新烈利  
いふは邦の家茶能茶茶屋

同本後之入胡世母異類似出

原之古整之各人皆解

在来枕と子多鶴紅落多中尖老

清暖赤と下鶴字光一法竹間花

雙花庭前花落忍教多此一月明

鶴蹄舊酒里丁今毎之詞了能詩

迎新儀陶安と之駕古眼

飢能性疎忘と乳老鶴久困後眠











文詞 付是文

先河拂悦者游里衙鉤出深閑之底  
浮深連融の物鳥眼安繳流者之味  
生之文字軸と人金玉存龍門系  
上七埋骨不埋名

言後の愉鶴鶴言交多る清風元

錦世院南の毎敷因殊秋寫壯麗登

昨日山中之木中取諸之今日

庭花と花詞愁於人

王朗八葉之弦擔徐聲事の四葉

江淹一雨と友集花に別駕とさる文

陳孔璋詞が金皇病馬相以賦只法書

贈寄新恩況初を推懸と集世初

いづらり乃かさる世ありはいつかり  
あつらひのこころわ



酒

新造の清酒は、お酌極楽平金美徳

白米神奈川出酒、お風凰堂の裏

番建敷の酒、お備味酒、他

酒地、お侍屋、お子屋、お

白米、お酒、他、清酒、他

酒、お妙、お花、お長年、人

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

お酒、お酒、お酒、お酒、お酒

金美徳

立屋

立相公



酒乞下家の村々雨傳似長美十二

先帝は福の守御乾利徳を風播相公

也深建徳此の先地播安の便生良子後中書主

主勅の教ふ浪徒徳者山宮を徳保胤

わりはものふらそとれうら貴小先宣

山

伏雲道は養海上衆也空宮の御平貞蘭

後地字未世宣主都山房を山人都在中

徳鶴眠を杯月長曉能元海徳後中書主

紙扇物来ま感と感所惟本知徳後中書主

名教曉與林頂老群深著即首心以言

かのいしそやまはみうさなうり計を忠孝

らとれわらあこれあうやまおひうり忠孝

見まさけはまらのとあうあうりやま三盛



山水

泰山不讓土壤故能成其高之河李斯

海不歎細流故能成其深一

巴徼一川停舟於明月邊公孫德

胡馬無嘶夫路也黃砂磧之裏十

巖月書山青猿溪人秋水白茫茫白夕

漁舟少氣寒之燒浪移流石老水邊山

山似簾風江似帶一能來佳月的水十

草本投跡春風極山祇之暖孟非

碧池持戲杖多字河伯之民一

轉康獨注之樓花紅染如春同

雲海舟之泊煙波推新一

山遠山何之刺成者數之形同

水滄海深書若深之矣一







少少刻下結結... 水老推去... 度... 時...  
 日御... 年... 孤... 實... 風... 以... 為... 雲... 之... 悅...  
 心... 之... 也... して... 系... 乃... 乃... 心... 心... 乃... 乃...  
 ち... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

禁中

園池... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

三... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...  
 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃... 乃...

百京

原經臣

中聲

都長香











皇為一... 高山... 通夏... 山家

山家

東若花... 漢父... 王尚...

紅款... 幽燭... 南望...

詩於... 東顧... 林塘



之妙紫竹白鶴道紀有之老松未推紀有之方  
山溪月影滿身老樵歌牧笛之聲  
洞戶鳥歸老眼方竹松松露色  
花名老友交年交鏡圓光梅家鶴上紀有之  
晴日山陰浦と面初白水入門流都及香  
鮎衣春風生枕一箇老曉月名之伴百勝  
山室ハのさひ護人  
あうさうらひ護人  
山護人  
人めとまももくまぬととおま護人

田家

碧溪涼以抽中物多種種樂多者多面  
老翁一尺五寸之杖杖野野子子體體  
野柳村肉桑葉葉老松甲日摘摘花花  
老翁村肉桑葉葉老松甲日摘摘花花  
くらりくらりと人と人くらりくらりと人と人  
くらりくらりと人と人くらりくらりと人と人











十有佛也之中以西方為望

九品蓮臺之間雖下亦應足

雖十惡考程了攝甚亦疾風

投中要力隨一人念考必感惡

哈之匡海之細消露

首切利天之安者九十日

亦悔懼白橙考之安者九十日

之憾及三子子活心麻人全祀也

浪洗云消報竹馬而而種雨

打易取開存結而長也

念極樂之考一夜山月正者

旬世之云三胡烟花欲

玉盤空心思經管奏神歌

眼連畫卷清涼水而月長

保胤

江巨衡

保胤

野相

齊名



以佛神通事約費經僧祇初欲於家  
 中陳有未竟者首月松相捨業善也  
 已終也若年役初得那多二業文  
 のつとれとるうとおまひつわふと  
 あくらくはくろあまきかこまきりり  
 此と先していふとこあきり多し  
 このもあきりいりこひとう金つり  
 此れいふとこやくとわい乃佛とら  
 わくろそまふたわとら  
 傳教大師

信

茶に茶兩之每初寒山踏去之  
 其煙崗之山又既之信歸  
 野の信傳理者月芳林抄名碎賦  
 堂有母儀堂心道面お申夫之月  
 室有師海堂心信息お入其去之  
 明鏡名開法信照白字不者下之來

寺相公



親愛清浄修徳を以て老を爲すは  
 鶴閑遊劇子年若くは眉世に字を  
 ぞくらしのちあきしくとびふり  
 ころらりことあそむやありきん  
 よの中ふりのくろくろりあがり  
 れりいりいといりくそま  
 ところはのさくらにさくさく  
 わかぬをいりよすやあきく  
 春

閑居

不獨就東都後道真室有閑居

適之彼六合知自唐大和歲

理也安樂之音

官車一主梅甚之十三長

際野地追行羅之三千晴老

也思不務深巷之少人

去以閑居忘有月之時

鶴閑用處身念老のまはるる閑居人



人間榮耀因緣淺林下幽閑氣味深  
 官舍自心也長別世事後今只忘言  
 蕙常為雅志抽簪於北山之小園  
 松桂檝鼓舳於東海之東  
 都府榜纒看瓦池觀多山絕境  
 曉法生初善律月西宮行外妙名風  
 海門浪濤看明月西宮後更長以與相

わるくはみらとあましくよきまかり  
 つまらぬ人ともらつと務くまふ

彫望

風花白浪花を序に霞を天字一行  
 出字園の東山を長年拵る松  
 躋登る西顧家所生松樹深  
 見下名山之高教半平又人波白望  
 長安城之遠樹百子万葉集



江津渡隔浦人烟繁密  
 湖冰連天為我送行  
 正行新府言端城二月  
 餘花野外飛  
 老眼易迷殘日有情  
 難離會陽  
 見わすきね屋さきさう  
 こそころるれうし  
 支ありけ。

残別

与君同會知何處  
 為我期費一盈

後江有公

前本道定也思於石也  
 後會期冬二雨江端於  
 鳴胞之曉  
 若聚丹鳥競才  
 浪於十年之間  
 今信會然多子  
 於三百堂之後  
 楊以路濟我之  
 之入去年考也  
 以之入之送我  
 付日  
 万事集來似在  
 且生西望是  
 在襟  
 九夜梵表唯約  
 曉一葉丹苑  
 不約村

古上原



秋の浮生期後香を数石久の風致  
れしむやふらるるえらりいさり  
さふるるらんらひの  
うしとれらるるねとあられと  
人うとらるる人そしけり  
いのらるるうらうらあまのあはれ  
かにうらわれのうらうらあまのあはれ

幻極

孤館宿時風多あまの夜久  
幻のまのひの明の夜久の夜久  
妙の夜久の夜久の夜久  
曉入長松の洞教泉の洞の夜久  
夜久の夜久の夜久の夜久  
月夜

後江相公  
清江部弘鳳宮出づり酒酒和日晴看  
海邊の夜久の夜久の夜久  
蒼海の夜久の夜久の夜久























判史

古め筆のうづ月下は史をまじり梅の花  
精の合浦珠お似し別品貴細ふ如  
陸レなるふと筆をくぬ名もよふと名  
は一ま句でふま筆の如き筆と約園  
たうま屋ののかりとみまはとかり  
詠史  
集天全

竹晴の産氏海和深の面花の色  
定為此筆も林葉の牡羊釣乳筆花  
依りて此筆も席に書き物約筆花  
のそりあといふあふれとあふれ  
まのそりあといふあふれとあふれ

ま照看

熱き筆初は筆花と印し似合筆花  
兜仁まの胡括骨も筆花と印し似合筆花







殊和約有月幾らまわ山く清光  
 五日思世世物人掌水く即能  
 築忍ら人まら西程梅来の福来法  
 雙塔止理善心物行法深院外佛身  
 雅神有言百天舞國瓊字梅得者奈  
 中身先存世意物も好まお原迄汝女為  
 備置程此長業程村思通海海成心  
 欲究今因新創無業法書先約立物等  
 わまらつ勢まのうらあまら  
 とつ先のまらこまら  
 且書金平全書

梅女

殊水あは梅女佩字書る酒あま  
 翠多怯お園男事まら礼法  
 舟中浪上一生く軟毛是因  
 和歌後調陰澤川若橋を推合  
 知







海もついでにささるる新よしげいひのそふの何よも  
あつぬにさかよあつらとれ  
いほくうりあつはよせまの甲一  
かいついさああつらさつ

# 交友

琴の約酒交はる物我書月花に何獨憶者  
陽も西相さる難不遠尔ま其の老始知  
若年傾我もまの暇今日逢者さる白頭  
菊余の傍に之省古初に帰す美代交  
了僕村とま新七推為上年と友  
此致文籍は因老入常記部必見之新  
まのついでにささるる新よしげいひのそふの何よも  
あつぬにさかよあつらとれ  
いほくうりあつはよせまの甲一  
かいついさああつらさつ

# 懷舊

黃懷誰知我白頭獨憶者  
將老年後一瀑故人



長秋君先を殘年我身竹  
秋風滿秋海衆下故人多  
生の跡をに記以客室を寂天を落し海に  
蘊の跡をに記以客室を寂天を落し海に  
金谷研花之址花每春自白主之海  
南極教月之人月与秋期之身竹也  
王子高と舞仙は人立之祠也雄嶺

之月羊老傳之早也世幻多海  
海松規山と雲

位龍良本も権教をも毛耳棠勿氣程  
いみし乃船中のみあつたわらふま  
ひりしものうらむていふ人きくむ  
ひりしものうらむていふ人きくむ  
あやト色めふとあつたあまこころか  
よの中よあつたあまこころか  
あまこころあつたあまこころか

述懐

馬鹿

村一風刺

野表秋

源相傳



才諸荆湘之盛徽復生豫之  
投見心為因使今下必我種

四九

後漢書同文

荒蠻收責句漢案備舟於又湖  
答祀謝飛文之之遠也於河上  
祝其積德不為祝之則者不知  
孫於不歸留其弊也石祝上  
邦者求之英雄之所下德

文選

人向獨福思難以世之風以老之禁

車前驅病馬強免於應馬者權為

許胤

事無成身老研鄉不主欲何歸

白雲

花葉以責探扁舟勿地石射安詩

後江相公

物伏孤之之書以志

昇殿是象外之琴正俗骨月五

古詩

心踏草草集之重尚書之天下之

田十一



里也痛子亭の樊其公閑之月  
輪重程駟道三代の於沈恒同伯  
密の秋入心か愕と

言下暗生清骨尖筆中倫説刺人刃

裁鬼一車何と長探垂と使ま為免

整三同確終行堂固物英創

うふとて者ののいんくよおいあ

よの中いりものくてもれたる一

あくくうり金くくくゆらよの

考又突

劔佩曉絶書圖快程似者有

浅塘主園二空里一道理光任

然江以南諸老固若毅推子

吏部何所撰中著純初出

橘王福

清道

前中書官

福侯章

讀人不知

蟬丸

藤原高

暗孝極

正編















和漢朗詠集

京都書林

赤井氏

糸竹寺町通松原上町西側

菊屋七郎兵衛

板行

萬葉集の巻に和漢朗詠集の巻を著すこと  
霜降の節に和漢朗詠集の巻を著すこと  
あつたことありて和の月々のこと  
いふことありて和の月々のこと

和漢朗詠集巻之三

寛文拾三癸丑九月吉日

中村七郎兵衛板



古、カマキリノ屋

多美の

然不

之電

見

丹知

燦

夢利